

[DATA VERIFICATION]

[FILE: 1996 vs 2026]

SLAM DUNK × INTERHIGH 2026

あの試合は、現実には起こりうるのか

[FICTION]

湘北 79-78 山王工業

30年前の伝説を、この夏に生まれた7,541個の現実で測りに行く。

[REALITY]

2026年インターハイ男子 全51試合

総得点 7,541点

結論から言う。 壊れているのは、 たった1か所だ。

スラムダンクの山王戦は「漫画だから成立した試合」
だと言われる。しかし、2026年夏の現実の数字
(51試合・7,541点) と突き合わせると、想像とはまる
で違う光景が現れる。

スコアも、身長も、個人スタッツも、ほぼすべてが
現実の内側に収まっている。たった1か所の「バグ」
が、この試合を30年間語り継がせている。
順に見ていこう。

[SCANNING...]

スコア



[MATCH]

[SCANNING...]

身長



[MATCH]

[SCANNING...]

個人スタッツ



[MATCH]

[SCANNING...]

試合展開



[ANOMALY
DETECTED]

CHECK 01 : FINAL SCORE

スコア 79-78 は、拍子抜けするほど「普通」だった

【FICTION】湘北vs山王 (1点差決着)

5点差以内

6~9点差

10~19点差

20点差以上

10試合 (19.6%)

6~9点差：7試合

10~19点差：20試合

20点差以上：14試合

得点：2026年平均147.9点に対し、両チーム合計157点。ハイスコアゲームですらない。

接戦率：全体の約20%（5試合に1試合）が5点差以内の接戦。準々決勝以降で30点差以上の試合はゼロ。

【VERIFIED】完全に現実的。むしろ平凡。

CHECK 02 : TEAM SIZE

現実が、山王工業を追い抜いていた

190.1cm

(2026年 U18男子日本代表の平均身長)

開志国際 (3位) 190.6cm

山王工業 主力7人 188.7cm

福大大濠 (優勝) 187.2cm

湘北 スタメン5人 185.0cm

中部大第一 (3位) 185.1cm

山王工業 スタメン5人 182.6cm

「無名の弱小校」湘北は、2026年の全国ベスト4（中部大第一）と全く同じサイズ。

「規格外の巨人軍団」山王工業のスタメンは、現代の4強に混ぜると下から2番目のサイズしかない。

[VERIFIED] 現実が追い越した。

1990年代の「化け物」は、2026年の標準装備

The Giant Evolution Matrix

[FICTIONAL MONSTERS]	[HEIGHT]	[2026 REALITY COUNTERPARTS]
河田美紀男 (山王1年)	210cm	アジャック アロング 207cm (開志国際) / ディヴァイン アボチ 206cm (中部大第一)
野辺将広 (山王3年)	198cm	音山繫太 199cm (中部大第一) / 山元珠来 197cm (大濠)
赤木剛憲 (湘北3年)	197cm	恒岡ケイマン 197cm (開志国際) / 清水祥敬 197cm (中部大第一)
河田雅史 (山王3年)	194cm	白谷柱誠ジャック 194cm (大濠)
宮城リョータ (湘北2年)	168cm	須藤祐海 169cm (北陸) / 池田楓真 172cm (開志国際)

1990年代の作中で描かれた「絶対王者」のサイズは、
2026年の日本代表合宿メンバーの平均 (190.1cm) を7.5cm下回る。

CHECK 03 : INDIVIDUAL STATS

「規格外のスコアラー」すら、現実に凌駕される

57点 - 恒岡ケイマン (開志国際・3回戦) + 18リバウンド 5スティール

33点 - 本田蒨以 (大濠・3回戦)

26点 - 沢北栄治 (山王・湘北戦)

25点 - 三井寿 (湘北・山王戦)

24点 - 白谷柱誠ジャック (大濠・決勝)

14点 - 桜木花道 (湘北・山王戦)

「高校ナンバーワン」沢北栄治の両チーム最多26点も、三井の25点も、全国トップのエースとしてはごく平常値。2025年大会では1試合46点の大記録も存在している。

【VERIFIED】
作中のほうが控えめ。

沢北栄治は、2026年の日本に実在する

Scouting Profile Cards

NAME: 沢北栄治 (FICTION)

GRADE: 2年 SIZE: 188cm

BIG GAME: 26点 (後半だけで22点)

TRAJECTORY: アメリカ留学へ

Scouting Profile Cards

NAME: 白谷柱誠ジャック (REALITY)

GRADE: 2年 SIZE: 194cm / 97kg

BIG GAME: 決勝24点10リバウンド
(前半だけで19点)

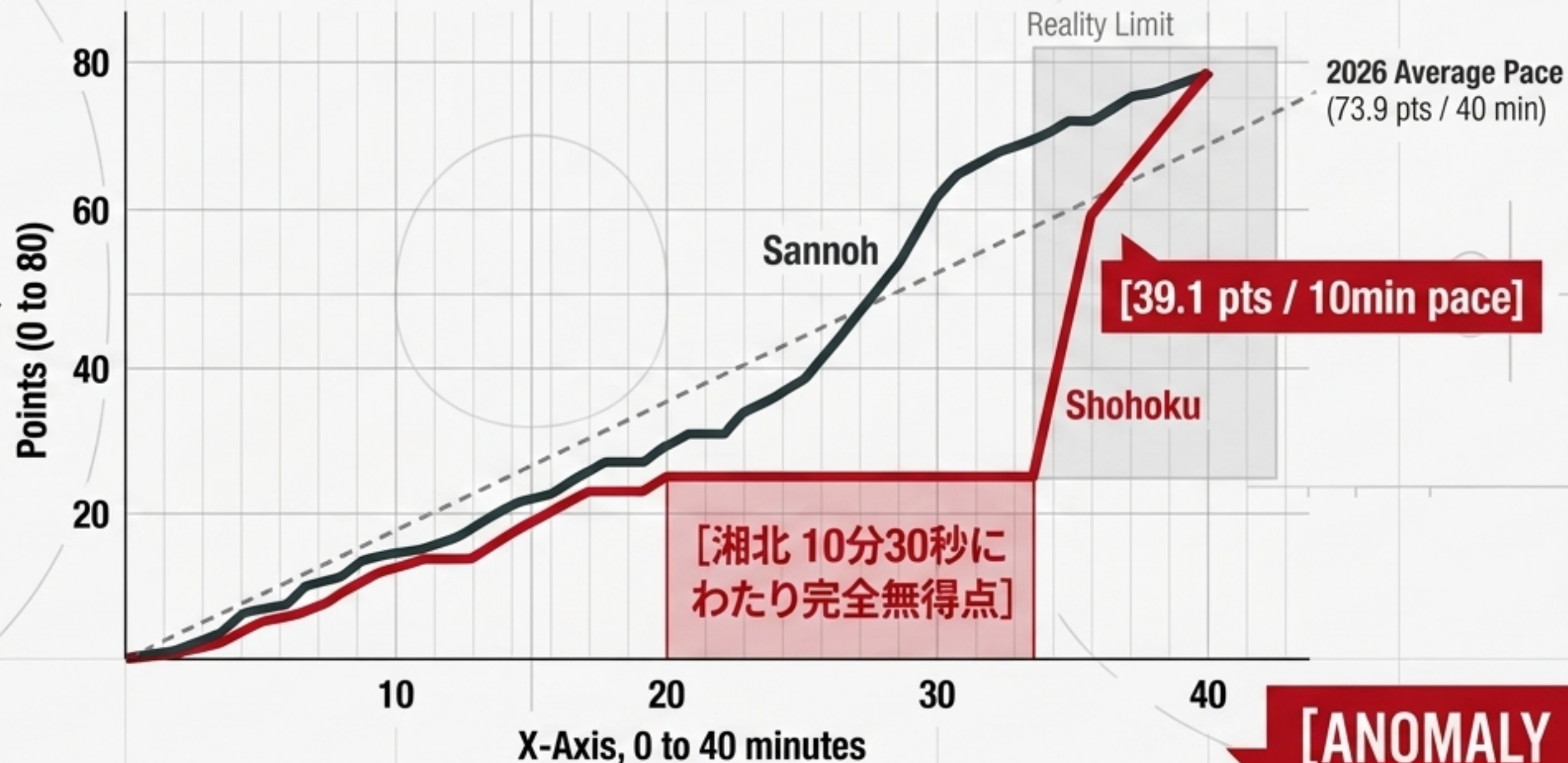
TRAJECTORY: B2ライジングゼファー福岡
特別指定契約 / U18日本代表

「高校2年で全国の頂点に立ち、すでにその先を見ている」という物語は実在する。
しかも現実の彼のほうが6cm大きく、すでにプロのコートに立っている。

CHECK 04 : THE ANOMALY

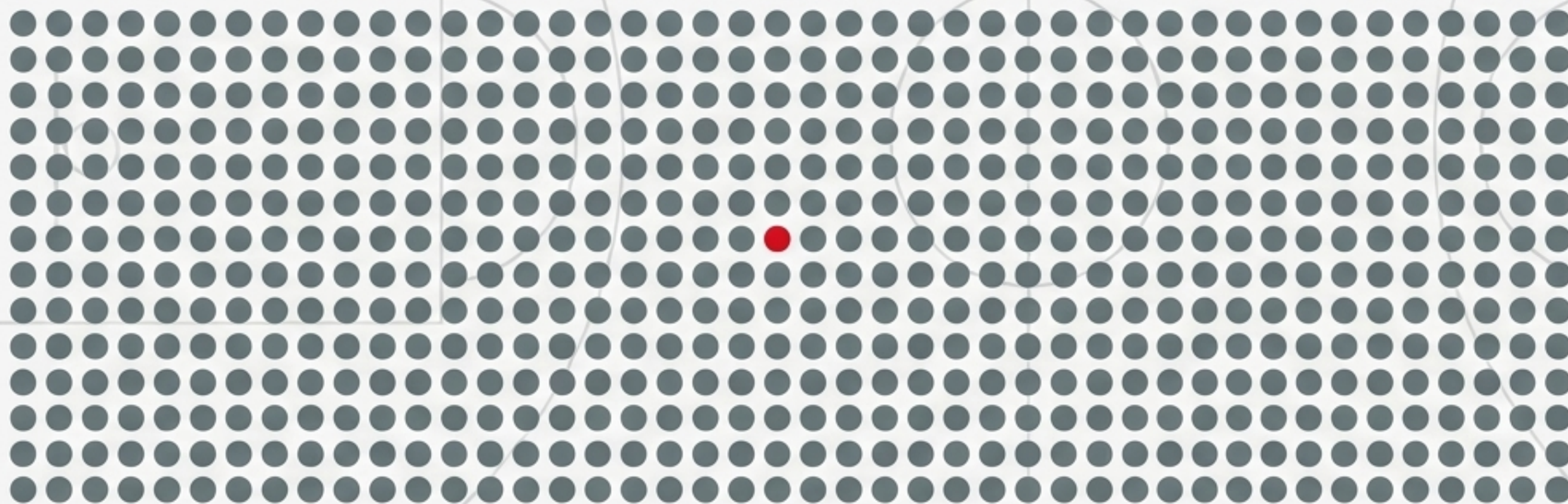
ここだけ、数字が完全に壊れている

湘北の反撃ペースは、現実の大会最高記録（開志国際 29.0点）をさらに +35% 上回る。しかも、山王の猛攻中、湘北は試合の 1/4 にあたる 10分半、1点も取っていない。



三井寿の 8/9 — 確率で殴ってみる

[0.259%]



高校トップシューターの
成功率を38%と仮定。

9本打って8本以上
決まる確率は

0.259%。

**= 386試合に
1回の出来事。**

あり得ない数字ではない。インターハイ全体なら「5年から14年に一度」は誰かがやってのける。
スラムダンクは、その「一世代に一度」を、よりによって山王戦のあの局面に置いた。

[VERIFIED - EXTREMELY RARE]

すべてが「同時に」起きたという異常性

シューティングナイト

3の大反撃ペース

集中力 セタス

絶対王者の失速

$$\left[\begin{array}{c} 386試合に \\ 1回の \\ \text{シューティング} \\ \text{ナイト} \end{array} \right] \times \left[\begin{array}{c} +35\%の \\ \text{大反撃} \\ \text{ペース} \end{array} \right] \times \left[\begin{array}{c} 10分半の \\ \text{完全無得点} \\ \text{からの} \\ \text{集中力} \end{array} \right] \times \left[\begin{array}{c} \text{絶対王者の} \\ \text{失速} \end{array} \right]$$

= 天文学的な非現実

検証項目の4/5は「現実的」。残り1つも「稀だが可能」。

なぜあの試合は奇跡に見えるのか？答えは単純だ。

これらが全部、同じ最後の11分間に、同時に起きたからである。

インハイ2026総括SPより



インターハイ2026 総括SP

04 / 19

本命企画：勝敗を最も説明する数字はどれか

1	eFG%（シュートの質）で上回る	勝率 79%
2	リバウンドで上回る	77%
3	アシストで上回る	74%
4	ベンチ得点で上回る	73%
5	ターンオーバーが少ない	65%
6	FT成功数／3P成功数で上回る	60%
7	ファウルが少ない	59%

※ 全101試合の公式記録に基づくバスくま独自集計

© バスくま（高校バスケ分析メディア）

井上雄彦は、スタッツを捏造しなかった。

**身長も、得点も、リバウンドも、
すべて現実の内側に置いた。
ただ、並べる順番だけを、あり得ない順にした。**

だからこの試合は、30年経っても2026年のデータで否定できない。

データが否定しているのは「起きたこと」ではなく「同時に起きたこと」だけであり、
それは統計が最も苦手とする領域——つまり、私たちがスポーツを見続ける理由そのものだからだ。